

『音楽学』書式の原則

『音楽学』編集委員会では第47巻1号（2001年度刊行）より、書式について統一をはかることにしました。学術論文の書式には言語や分野によって様々な方式があり、絶対的な基準が存在するわけではありませんが、執筆者は可能な限りこの「書式の原則」に則ってください。なお編集委員会は執筆者のご意見を尊重しつつ、必要と認める場合に書式上の統一を行うことがあります。

[2020年11月19日 一部改正]

当文書では全角スペースは□、半角スペースは_で表します。

2017□*Journal_of_the_Musicological_Society_of_Japan*_は、実際には
2017 *Journal of the Musicological Society of Japan* となります。

1 論文の基本構成（「研究と報告」もこれに準じる）

・和文による論文の基本構成は以下の通り（*印で挟んだ部分は必要がなければ省略可）。

和文タイトル *——副題——*（副題を2倍ダッシュで囲む）
欧文タイトル *:_副題*
本文
注
引用文献
参照楽譜
参照音源

・欧文による論文の場合は、欧文タイトル、和文タイトルの順とする。それ以外は和文による論文の基本構成と同じ。

・原稿には、ページ下中央にページ数を記載する。

・論文の場合、和文要旨ならびに欧文要旨を本文とは別ファイルにまとめ、以下を記す。

「研究と報告」に要旨は必要ない。

【ファイル1】和文タイトル・和文要旨

【ファイル2】欧文タイトル・欧文要旨

・執筆者名は、査読の際に伏せるため本文ならびに要旨には記さず、別のファイルにタイトルとともに日本語と欧語で記して添付する。執筆者姓名の順は各言語の順序に従い、姓はすべて大文字で記す。

例1 伊澤修二 IZAWA Shuji

例2 クラーラ・ヨゼフィーネ・ヴィーク＝シューマン Clara Josephine WIECK-SCHUMANN

2 書評・紹介の基本構成

・書評・紹介の基本構成は以下の通り。*印で挟んだ部分は必要がなければ省略可。

書誌データ
本文
参考文献

執筆者姓名（右寄せ・ゴシック体）

・書誌データ

著者名または編者名（姓名の後に日本語で「著」「編」等を記す）

書名

和書の場合は『 』の中に入れ、洋書の場合はイタリックにする。

和書の副題を表す2倍ダッシュは副題の前のみとする。

（出版地：出版社，出版年月日，ページ数，価格，ISBN）

出版地の後にコロンを入れる（和書は全角，洋書は半角）

出版地（都市名）が複数ある場合は主要なものを記す。

洋書は出版年のみを記載する。

ページ数は半角を用い，対象書の記載に準じて記す。

例1 （和書） 277 + xvi 頁

例2 （和書） v + 370 頁

例3 （洋書） xx + 246 pages

例4 （洋書） xxxiii + 583 Seiten

価格は和書の場合には「税抜き価格＋税」とし，洋書の場合は価格のみを記す。

例5 ¥3,000 + 税

例6 £70

例7 \$120.00

・和書の書誌データ記載例

例8 塚田健一著

『アフリカ音楽学の挑戦——伝統と変容の音楽民族誌』

（京都：世界思想社，2014年2月28日，図版4 + x + 408 頁，¥5,800 + 税，

ISBN978-4-7907-1617-4）

例9 周東美材著

『童謡の近代——メディアの変容と子ども文化』（岩波現代全書 076）

（東京：岩波書店，2015年10月21日，viii + 277 頁，¥2,500 + 税，ISBN978-4-00-029176-7）

・複数の著者、編者による著作

「他」、「et al.」を使わずに全員（10名まで）の名前を記す。名前はカンマで区切る。

例10 西田紘子，安川智子編著，大愛崇晴，関本菜穂子，日比美和子著

『ハーモニー探究の歴史——思想としての和声理論』

（東京：音楽之友社，2019年1月31日，190 頁，¥2,500 + 税，ISBN978-4-276-10254-5）

・洋書の書誌データ記載例

例11 Suzel Ana Reily, Katherine Brucher 編

Brass Bands of the World: Militarism, Colonial Legacies, and Local Music Making

(Surrey; Burlington: Ashgate, 2013, xx + 246 pages, £95.00, ISBN978-1-4094-4422-0)

・原稿には，ページ下中央にページ数を記載する。

3 文字等の表記

・文献の引用・固有名詞などの特殊な場合をのぞき，現代仮名遣いと常用漢字を使用する。

- ・ 主要な人名は初出時にフルネームで記し、原綴と生没年を併記する。数字は en ダーシで繋ぐ。

例 1 フランシス・プーランク_Francis Poulenc (1899–1963) は…

- ・ 日本人の名前は初出時にフルネームで記し、丸括弧内に生没年を併記する。数字はハイフンで繋ぐ。
なおハイフンは組版の際に二分ダーシに変換される。

例 2 武満徹 (1930–1996) *名前と数字に MS 明朝を使用した場合

- ・ 外国語のカタカナ書きは、論文中で統一されている限り特殊な表記も差し支えない。

- ・ 数字は原則としてアラビア数字を用いる。ただし慣用語、固有名詞、度量的意味の薄いものには漢数字を用いてもよい。アラビア数字は文献表や文献参照箇所を示すページ数を含めすべて半角を用いる。本文中では 1 桁数字は組版の時点で全角の真ん中におかれる。

- ・ 同じ語の表記は原則として統一する。例えば、以下のような語は表記の混在が起りやすいので、注意が必要。

「～のなかで／～の中で」「～のとおり／～の通り」「できる／出来る」「わかる／分かる」「たしかに／確かに」等。

- ・ 各種記号の使用法については「書式の原則」最終ページに示した表を参照のこと。

- ・ ピリオドの後には半角スペースを挿入する。

例 3 J. _S. _バッハ

例 4 ピアノ協奏曲第 21 番ハ長調 K._467

4 本文における引用

- ・ 短い引用は鉤括弧「 」を使う。

- ・ 長い引用は独立した段落とし、前後の段落とは 1 行空けて、全角 2 文字下げる。

- ・ 引用文中の中略には [……]を用いる。

5 注の付け方

- ・ 投稿時には後注方式で執筆する（本誌掲載のための組版の時点で、音楽之友社編集部において脚注方式に変換する）。

- ・ 注記番号にはアラビア数字を用い、番号のみを当該箇所の右肩上に記す（組版の時点で所定の方式に変換する）。

例 1 The means by which the traditional Western composers have attempted to communicate with their audience have been discussed at length by Eduard Hanslick,² Heinrich Schenker,³ Suzanne Langer,⁴ and Leonard Meyer,⁵ to name but a few.

例 2 「音場は、温度などの環境変化によって常に変動し、また騒音信号も常に定常的とは限らない¹⁶」。

- ・注で書誌情報を詳しく記述する方式は避け、参照した文献の詳しい書誌情報は、論文の最後に「引用文献」としてまとめる。
- ・注のなかで書誌情報に言及する必要がある場合は、本文と同様に丸括弧方式で言及する。

6 引用文献・参考文献・参照資料の書式

- ・文献の表示には原則として著者－刊行年（Author-Date Reference）方式を用いる。
- ・日本語文献（資料）は著者姓の五十音順、欧文文献（資料）は著者姓のアルファベット順にそれぞれ配列する。
- ・インターネットを通じて文献等を引用・参照した場合には、その情報を明示する。

（1）日本語文献

単行本

〈基本例〉著（編）者名□刊行年□『書名』（叢書情報等）□刊行地：刊行所〔収録情報等〕

例1 林謙三□1964□『正倉院楽器の研究』□東京：風間書店

古典文献

- ・基本的に現代の刊行物に準ずる。ただし、活字本・校注本・訳注本・復刻本・影印本などの場合は底本を主とし、参照した書籍の書誌情報を〔収録情報等〕として加える。

例2 秀松軒（編）□元禄 16（1703）□『松の葉』□京都：井筒屋庄兵衛，万木治兵衛〔復刻版
□浅野健二（校注）□1959□『中世近世歌謡集』（日本古典文学大系 44），341-530□東京：
岩波書店〕

複数著者 例3 今谷和徳，井上さつき□2010□『フランス音楽史』□東京：春秋社

複数編者 例4 細川周平，片山杜秀（監修）□2008□『日本の作曲家』□東京：日外アソシエーツ

例5 フェルド，スティーブン□1988□『鳥になった少年——カルリ社会における音・神話・象徴』
（テオリア叢書）□山口修，他（訳）□東京：平凡社

論文集（単行本）内の1論文

例6 ミドルトン，リチャード□2011□「序章——音楽研究と文化の思想」『音楽のカルチュラル・
スタディーズ』□マーティン・クレントン，トレヴァー・ハーバート，リチャード・ミド
ルトン（編著）□若尾裕，ト田隆嗣，田中慎一郎，原真理子，三宅博子（訳），1-18□東京：
アルテスパブリッシング

*日本語文献のページの範囲を示す場合は、数字をハイフンで繋ぐ。

雑誌等

- ・近年定期刊行物が増えているため、発行者名を付すこととする。ただし本誌『音楽学』や発行者名が明白な場合については、発行者名（日本音楽学会など）を省いてよい。

〈基本例〉著者名□刊行年□「論文名」□発行者名『雑誌名／紀要名』巻号：ページ

例7 林光□1991□「創造と日常のあいだ——バッハ・モーツァルト・宮澤賢治」□音楽教育の会『音
楽教育』325：7-20

*日本語文献のページ数の前には全角コロンを用いる。ページの範囲を示す場合は、数字をハイフンで繋ぐ。

- 例8 相沢陸奥男□1954□「音楽学の成立並に各分野の関連に就て」『音楽学』第1巻1号：7-20
例9 角倉一朗□2000□「20世紀のバッハ研究」『東京藝術大学音楽学部紀要』第26集：47-65

新聞等

〈基本例〉著者名□刊行年□「記事タイトル」『新聞名 必要に応じて地域版名』掲載日付と朝夕刊の別や版：ページ

- 例10 谷村晃□1961□「ヒュッシュの枯淡な味」『朝日新聞』1961年12月5日□大阪本社版夕刊：5
・インターネットを通じて定期刊行物を引用・参照した場合
例11 著者不明□2008□「慶応150年式典に天皇，皇后両陛下」『朝日新聞』2008年11月9日朝刊：社会面（『聞蔵Ⅱビジュアル』<http://database.asahi.com/>□2017年2月7日閲覧）

（2）欧文文献

文献のタイトル表記は以下の原則に従って記述する。

- 英語 タイトルにはセンテンス方式ではなく、ヘッドライン方式を用いる。最初の文字、および全ての名詞、動詞、形容詞、副詞の頭文字は大文字とし、その他は小文字とする。
仏語 タイトルの最初の文字および固有名詞の頭文字は大文字とし、その他は全て小文字とする。
独語 タイトルの最初の文字、および全ての名詞の頭文字を大文字にする。
他の言語 ローマ字に転写したアラビア語、ロシア語などは当該言語の習慣に従う。

単行本

〈基本例〉著者姓、_名._刊行年._書名._刊行都市名：_刊行所。〔必要に応じて翻訳書情報等〕

- 例12 Small, Christopher. 1998. *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*. Hanover, N. H.: University Press of New England. [スモール, クリストファー□2011□『ミュージッキング——音楽は「行為」である』□野澤豊一, 西島千尋(訳)□東京：水声社]

複数の編者による著作

- 例13 Blum, Stephen, Philip V. Bohlman, and Daniel M. Neuman, eds. 1993. *Ethnomusicology and Modern Music History*. Urbana: University of Illinois.

論文集（単行本）内の1論文

- 例14 Gould, Glenn. 1984. "Streisand as Schwarzkopf." In *The Glenn Gould Reader*, edited by Tim Page, 308-11. New York: Vintage Books.

*ed.を用いず、edited by とする。

*欧文文献のページの範囲を示す場合は、数字をenダーシで繋ぐ。

著者に加えて編者、翻訳者がいる著作

- 例15 Adorno, Theodor W., and Walter Benjamin. 1999. *The Complete Correspondence 1928-1940*. Edited by Henri Lonitz. Translated by Nicolas Walker. Cambridge, MA: Harvard University Press.

*大文字で Edited by, Translated by とする。

刊行都市名は代表的なもの一つのみ記す。二つ以上あげる必要はない。

×Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

○Berkeley: University of California Press.

雑誌等

〈基本例〉 著者姓, 名. 刊行年. “論文名.” 雑誌・紀要名 巻号: 論文全体のページ.

例16 Cummings, Paul. 2016. “The Pivotal Role of Hans Richter in the London Wagner Festival of 1877.” *Musical Quarterly* 98, no. 4: 395–447.

* 雑誌名にしばしば付される The は省略できる。

例17 Shelemay, Kay Kaufman. 1980. “Historical Ethnomusicology: Reconstructing Falasha Liturgical History.” *Ethnomusicology* 24, no. 1: 233–258.

同一著者の表示

例18 Lewin, David. 1982. “A Formal Theory of Generalized Tonal Functions.” *Journal of Music Theory* 26, no. 1: 23–60.

———. 1992. “Some Notes on Analyzing Wagner: ‘The Ring’ and ‘Parsifal’.” *19th-Century Music* 16, no. 1: 49–58.

* 3-em dash の後にピリオド（編者の場合コンマ——, ed.）を用いて略記する。

* 日本語の場合は——の後にピリオドは要らない。

同一著者による同一刊行年の著作

例19 Hindley, Clifford. 1990a. “Contemplation and Reality: A Study of Britten’s ‘Death in Venice’.” *Music and Letters* 71, no. 4: 511–23.

———. 1990b. “Why Does Miles Die? A Study of Britten’s ‘Turn of the Screw’.” *Musical Quarterly* 74, no. 1: 1–17.

* 同一著者による同一年に刊行された著作は、タイトルのアルファベット順（冠詞は除く）に従って、刊行年に a, b, c をつけて区別する。

（3）漢籍・中国語文献

漢籍

・古典籍（和刻本、日本漢籍、高麗本等を含む。また版本・手抄本を含む）

〈基本例〉（朝代）撰（編）者名□刊行年□『書名』（叢書情報等）□刊行地：刊行所〔書誌情報等〕

例 20 （清）錢大昕（撰）□（清）錢慶曾（校注）□ 1876□『十駕齋新録二十卷余録三卷』□ 浙江：浙江書局〔光緒二年丙子(1876)浙江書局重刻，8冊1帙，木版，線装〕

・活字本（排印本）・校注本・訳注本・復刻本・影印本等

原則として「（1）日本語文献」の古典文献の欄に準ずる。

* 書名や引用文は基本的に日本の常用字体を用いることとするが、必要に応じて原書の字体（正字体・旧字体・異体字など）を用いてもよい。

* 原則として中国の人名には「(唐) 白居易」「(北宋) 沈括」のように朝代・年代を（ ）に入れて添える。撰者未詳の場合は「佚名（撰）」とする。

中国語文献

・現代中国語による著作や論文の場合、基本的に日本語文献に準ずる。

* 書名や引用文における中国語の簡体字・繁体字は原則として日本の常用字体に改める。ただし特に必要な場合は簡体字・繁体字の使用を妨げない。

例 21 楊蔭瀏□1981□『中国古代音楽史稿』□北京：人民音楽出版社

（特に字体を論ずるのでない限り「杨荫浏『中国古代音乐史稿』」とはしない）

(4) 事典の項目

例22 Planchart, Alejandro. 2001. “Dufay.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed., edited by Stanley Sadie and John Tyrell. London: Macmillan.

例23 Guignard, Silvain. 1994. “Biwa.” In *MGG2_Sachteil_1*, 1556–1559.

* ドイツ語の事典の書式は英語の場合と異なる。

(5) 視聴覚資料

作曲家、録音年、録音タイトル、演奏家・演奏団体名、指揮者、レーベル名、出版年、種類を記す。

作曲家に基づく表示

例 24 Brahms, Johannes. 2008. *Gergiev Conducts Brahms “Ein Deutsches Requiem.”* Swedish Radio Choir and Rotterdam Philharmonic Orchestra conducted by Valery Gergiev. Performed May 25, 2008. Åkersberga, Sweden: BIS, 2010. DVD.

演奏家に基づく表示

例25 Rubinstein, Artur, pianist. 1946 and 1958–76. *The Chopin Collection*. Recorded 1946, 1958–67. RCA Victor/BMG 60822-2-RG, 1991, 11 CDs.

編者等がいる場合

例26 雅楽紫絃会 □ 『雅楽大系』 □ 芝祐靖 (監修) □ ビクター伝統音楽振興財団 : VZCG-8125-8, 2002, 4 CDs.

(6) 視聴覚資料に添えられた文章 (CD 解説など)

例27 湯浅譲二 □ 1997 □ 「実験工房コンサート」 □ 『実験工房の音楽』, 10-17 □ FONTEC : FOCD3417

例28 Munrow, David. 1976. “Music of the Gothic Era.” Liner notes for *Music of the Gothic Era*, 10-24. ARCHIV 453 185-2.

* 日本盤のCD解説のページ数の範囲はハイフン (日本語用) で、海外盤のCD解説のページ数の範囲は en ダーシで示す。CD番号にはハイフン (欧文用) を用いる。

・ インターネットを通じて録音や録画を視聴した場合

例29 林広守 □ 《君が代》 □ 辻順治 (指揮), 陸軍戸山学校軍楽隊 □ ビクター, 52084, 1932-01 (『国立国会図書館デジタルコレクション 歴史的音源』 □ <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3579872> □ 2016年3月31日視聴)

(7) 楽譜

作曲者名、出版年、曲名、編者・校訂者名、曲 (集) 名等を記す。

例30 山田松黒 (編) □ 安永 8 (1779) □ 『箏曲大意抄』 全 6 冊 □ 名古屋 : 尾張書肆

例31 Verdi, Giuseppe. 2008. *Giovanna d’Arco, drama lyrico* in four acts. Libretto by Temistocle Solera. Edited by Alberto Rizzuti. 2 vols. Works of Giuseppe Verdi, ser. 1, Operas. Chicago: University of Chicago Press; Milan: G. Ricordi.

例32 Schubert, Franz. 1988. “Fantasie in C.” In *Werke für Klavier zu zwei Händen, Band 4 Klavierstücke I*, edited by David Goldberg. Neue Ausgabe sämtlicher Werke, vol. 7, no. 2, 83–97. Kassel: Bärenreiter.

(8) ウェブサイト

著者、発表年、ページ名、ウェブサイト全体の名称、アドレス、更新日 (または閲覧年月日) 等を記す。

例33 東京大学附属図書館 □ [2003] □ 「博覧会関係資料 (常設展2003年4月～6月) □ http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/josetsu/2003_04-06/ □ (2015年12月31日閲覧)

例34 著者・発表年不明 □ 「東洋汽船北米航路汽船発着表」 (『20世紀時刻表歴史館』ウェブサイト内) □ http://www.tt-museum.jp/taiyo_0030_tyk1924.html □ (2016年4月1日閲覧)

ブログ

- 例35 Oramo, Ilkka. 2007. “The Sibelius Problem.” *Studies in Music and Other Writings* (blog),
_October 1, 2007. <https://relatedrocks.com/2007/10/01/the-sibelius-problem/>

DOIの表示

従来使われているURL (Uniform Resource Locator) の代わりにDOI (Digital Object Identifier デジタル・オブジェクト識別子) を示してもよい。DOIは電子資料を恒久的に特定できる方式であるため、閲覧日を表示する必要はない。

- 例36 Middleton, Richard. 2004. “Lennon, John Ono (1940-1980).” In *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford University Press, 2004; online ed., 2011.
<https://doi.org/10.1093/ref:odnb/31351>.
- 例37 Brown, Maurice J. E. 2001. “Barcarolle (Fr.; It. Barcarola).” Revised by Kenneth L. Hamilton. In *Grove Music Online*. <https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.02021>

7 本文における引用文献・参照資料の提示方法

本文中で文献を引用または参照する場合は、言及した直後に著者姓、発行年、参照ページ等の書誌情報を丸括弧でくくり、本文に挿入する(例1)。著者姓と発行年の間は半角スペース、発行年とページ数の間はカンマと半角スペースとする。丸括弧は、言及文献の和洋を問わず全角で入力する。

- 例1 (Dahlhaus_1983,_277)
(末吉_2000,_24)

複数の著者、編者による著作

- 例2 (西田, 安川, 他_2019,_112)
(細川, 片山_2008,_348-349)
(Adorno and Benjamin,_1999,_112-113)
(Nettl et al._1992,_18-23)

- *注や括弧注では全員の名前を書かずに「他」を使う。
- *欧文文献の著者(編者)が4名以上の場合は et al. を使う。
- *括弧注に「監修」、「編」、「eds.」は入れない。
- *f. ff.はなるべく用いずに、正確なページ数を記入する。

- ・文中に著者姓があらわれる場合には、丸括弧内で再録(例3 a)せずに、例3 bのように記す。

- 例3 a 柴田(柴田_1978,_29-30), 小塩(小塩_1992,_86-87)に見られるように,
例3 b 柴田(1978,_29-30), 小塩(1992,_86-87)に見られるように,

- ・文中で執筆者の著作を指示する場合、査読に際して執筆者名が判明しないよう、「拙著」「拙稿」「別稿」ではなく執筆者の姓で記す。出版予定の文献については記載しない。

- ・複数巻からなる文献から引用箇所を示す場合、例4のように、巻号の後にコロンを挿入し、ページ番号を示す。コロンの後にスペースは入れない。

- 例4 (Kusnierek_1992,_3:125)
(勝田_1982,_2:963)

- ・参照文献として巻号そのものを挙げる場合には、例5のように、「vol.」あるいは「巻」等を挿入して、ページ数を示す場合との混同をさける。

- 例5 (Pasler_1995,_vol._2)
(後藤_1991,_第4巻)

- ・参照ページが複数巻にわたる場合には、例6のように、巻と巻をセミコロンで分ける。

- 例6 (Pasler_1995,_2:2,_35;_3:50-53)
(角倉_1997,_1:141;_4:330,_450)

- ・参考文献の特定ページの注を参照する場合は、例7のように、ページ数の後にスペースやカンマを入れずにn (noteの略)と注番号を記す。

- 例7 (Taruskin_1996,_95n2)

※著者-刊行年方式になじまない資料（たとえば著者の苗字が特定できない写本等、あるいは行政資料等）の場合、略号を用いることができる。その際には、「引用文献」の冒頭に「文献略号一覧」を付す。

※文献の表記方法については、Chicago Manual、ウィンジェル『改訂新版 音楽の文章術』等を参照し、適切な方法で統一すること。

- ・古典文献において「著者姓・発行年」という書き方がなじまない場合は、適切な書き方を用いてよい。

例8 『源氏物語』「若菜上」

- ・古典籍の引用については基本的に日本語文献に準じ、漢字については原則として日本の常用字体を用いる。ただし必要に応じて原書の表記（正字体・旧字体・異体字など）を用いてよい。仮名遣いについても原文の歴史的仮名遣いを用いてよい。

*ページ数については「第●葉表」「第●葉裏」「第●丁表」「第●丁裏」等の表記を用いる。

*ただし影印本においては底本の葉数（丁数）ではなく、影印本のページ数を用いる。

- ・漢文の引用文については、特に訓点の施し方を論ずる上で必要な場合を除き、訓点（返り点）は用いない。
- ・日本の古典文献と同様、漢文文献においても必要に応じて書名・篇名の表記を適宜簡略化してよい。

例9 『礼記』「楽記」

例10 『周礼』「春官宗伯・大師」

例11 『晋書』卷16「律曆志上」

例12 『宋史』卷311「晏殊伝」

- ・現代中国語による著作や論文については、基本的に日本語文献に準ずる。

*中国語原文の引用は原則として日本の常用字体に改める。ただし特に必要な場合は簡体字・繁体字の使用を妨げない。

8 引用楽譜・図版・写真等について

- ・ 譜例や図表，写真については，「譜例 1」「図 1」「表 1」等の番号とキャプションをつける。番号とキャプションは，譜例等の前に提示する。譜例・図表・写真に付されるキャプション，説明文も原稿の字数に含まれる。

例

表 1 『音楽学』論文等の掲載数（2011～2018年度）

	第 57 卷 (2011)	第 58 卷 (2012)	第 59 卷 (2013)	第 60 卷 (2014)	第 61 卷 (2015)	第 62 卷 (2016)	第 63 卷 (2017)	第 64 卷 (2018)
論文	7	5	5	10	3	5	7	9
研究と報告	0	0	1	0	0	0	0	0
書評	5	12	11	15	10	14	12	14
紹介	0	0	0	1	1	3	2, 報告1	3

- ・ 著作権表示が必要な楽譜等を使用する場合は，必ず該当箇所に明示する。著作権表示が必要か否かの判断や，それに伴う出版社や著作権者との手続き等は，執筆者本人が行う。その際『音楽学』が学術刊行物であること，紙媒体の冊子体で出版されること，発行 1 年後にウェブ上でも公開されることを伝えた上で，許諾を得る。著作権使用料が派生した場合には執筆者の自己負担とする。

9 各種記号の使用法

名称	記号	用法	例	備考
中黒	◻	名詞の並列	東洋・西洋	
ピリオド	◻	1. 欧文単語の省略 2. 名前の省略	ed._ J._S._バッハ	ピリオドの後に半角スペースを挿入。 全角記号の場合にはスペースは不要。
傍点	・・・	特に力点を置く字句		
ダブル引用符	“ ”	欧文引用文		
角括弧またはブラケット	[]	1. 引用文への補足・修正 2. 書誌情報の補足		和文では全角で表示
丸括弧またはパーレン	()	補足的な説明		和文では全角で表示
鉤括弧	「 」	1. 和文引用文 2. 雑誌論文等の和題目 3. 強調		
二重鉤括弧	『 』	1. 「 」内での引用文 2. 和書名, 和雑誌名	『音楽学』第1巻1号	
二重山括弧	《 》	作品名	《カンタータ第82番：我は満ち足れり Ich habe genug》 (BWV 82)	
山括弧	〈 〉	曲集、組曲内の一楽曲のタイトル オペラのアリアなど	《冬の旅》より〈菩提樹〉 《クープランの墓》より〈リゴドン〉 《ディドとエネアス》より〈私が土の下に横たわるとき〉	不等記号< >とは異なるので注意
ハイフン(欧文用フォント)	- (Times New Roman)	1. 欧文の単語を繋げる 2. 数字の分離 (ISBN 番号、CD 番号) 3. 複合語による固有名詞を繋ぐ	<i>19th-Century Music</i> ISBN978-4-7907-1617-4 MDG 613 1911-2 Jean-Jacques Baden-Baden	en ダーシより短い
ハイフン(日本語用フォント)	- (MS 明朝)	和文において数の範囲を示す (生没年, 文献の頁数、小節数)	1770-1827 125-130	組版の時点で二分ダーシに変換 欧文のハイフンより長い *波ダーシは用いない

en ダーシ	—	1. 欧文において数の範囲を示す (生没年、文献の頁数) 2. 複合語をつくる	1686–1750 38–40 Sonata–allegro form	N の幅のダーシでハイフンよりやや長く em ダーシより短い
em ダーシ	—	欧文において、文中に語句を挿入する場合に前後に置く	The influence of French composers—Debussy and Ravel—is obvious in his work.	M の幅のダーシで en ダーシよりやや長い
3-emダーシ	———.	同一著者の表示	Lewin,_David. ———.	em ダーシ 3 個とピリオド
二重ハイフン	=	複合語による外国語の固有名詞を繋ぐ	ジャン=ジャック	欧綴ではハイフン
二倍ダーシ	——	1. 和文における挿入句 2. 和書の副題を示す		全角 2 字分使用
リーダー	……	省略		全角 2 字分使用 (1 字分に 3 点)
リーダー	[……]	引用文中の中略		全角 2 字分使用 (1 字分に 3 点) ブラケットに入れる
ルビ		ふりがな (漢字の上に)	<small>おんがくがく</small> <small>へんしゅう</small> 『音楽学』編集	